

書 評

Jean RENSON : Les dénominations du visage en français et dans les autres langues romanes, étude sémantique et onomasiologique (Bibliothèque de la Faculté de Philosophie et Lettres de l'Université de Liège: fasc.162) Paris, Les Belles Lettres 1962.

ここに取り上げる研究は700頁を超える大著であって、Liège大学のChef de Travaux, Jean Renson氏の13年に亘る努力の結実である。研究は主としてフランス語の領域に向けられ Gloses de Cassel (ラ・ゲルマン単語集Ⅷ世紀), de Reichenau (ラ・仏, X世紀初頭)からXI世紀末までのoïl語の全テキスト, XII世紀のテキスト88, XIII世紀のテキスト134から現代に至る計523テキストから得られた「顔」を示す例文45,092例と、各世紀の各種辞書と方言辞書、言語地図まで援用し、まずフランス語の領域は殆んど調査されているといえる。これに反して他のロマン語ではプロヴァンサル語がやや詳しく44p.に亘って概説されている他は、イタリア語文献15による調査結果24p., イスパニア語15文献10p., ポルトガル語9文献9p.の他は、辞書のみによって言及されたルーマニア語に4p., レト・ロマン語に2p.が割かれているのみである。従ってロマン語文献学の研究というよりむしろフランス語学研究の書であるが、時間的空間的な広い調査結果には興味深い点が多いので、その一斑を紹介したい。

フランス語で「顔」を示す語の一つ *la face* については、この語がXVII世紀にある俗語的用法を契機として急に慣用から廃され、*le visage* によってとって変られた事実は、F. Brunotの仏語史、またVaugelasのRemarquesによって夙に知られている事実であって、W. v. Wartburgも、思いもかけぬ偶然が単語の運命を左右した例にこの語をあげて次のように要約している。Il y a encore d'autres mots dont la position semble solidement établie et que se voient dépouillés un beau jour, par un accident subit, de leur vieil héritage traditionnel. Tel fut par exemple le cas du français face. Jusqu' au XVII^e siècle le mot était d'usage courant, et nul danger ne semblait le menacer. C'est alors qu'un plaisantin eut l'idée d'appeler le séant de l'homme la face du grand Turc. Cette métaphore devint vite monnaie courante dans le style burlesque, ce qui rendit le mot face impossible. Il fut banni de la bonne société et par là condamné à mort... (Problèmes et Méthodes de la Linguistique 1963², p. 130) 顔を示すフランス語については、G. Gougenheimも "Les mots français dans l'histoire et dans la vie" (Paris 1962, pp. 109~112) で論じていて、極めて目新しい問題ではない。Renson氏の貢献は、この一見発展性に乏しい問題を地味に追求し、多くの問題を明らかにした点にある。

ラテン語で顔を示す語として著者は *vultus*, *facies*, *os* を挙げ、古典ラテン語

(27作品), 俗ラテン語聖書, 中世ラテン語の用例の比較によって os の後退の後 *facies* が *vultus* より好んで使われるのは聖書 (Vulgata) の影響であることを示した。

facies は俗ラテン *facia* の形と共にロマニア全般に拡まるが, フランス語には特に詩編の仏訳によって定着して行く。

中世フランス語においては, *chère*, *vis*, *visage*, *face*, *vout*, *viaire*, *façon* 等の語が用いられ, XV 世紀に *mine* が, XVII 世紀に *figure* が「顔」の意にたかわれ, XIII 世紀に医学術語として表われる *Physionomie* も XIV 世紀末から「顔」の意が現われはじめ, XVIII 世紀に広く用いられる様になる。ancien français 期に頻度の高いのは *vis* と *chère* であるが, *vis* は特に韻文に多く使われ, 散文作品で現われる場合も韻文作品からの翻案に多い。武勲詩では *vis* は *locution figée* で現われる事が多く, *visage* が単独で使われるのに対する。 *chère* は polyvalent であるが, 「顔付」の意では特に XII, XIII 世紀に *à la chère hardie*, *à la chère membrée* の *locution* が武勲詩に多いのが注目される。古典ラテン語で特にアウガストゥス期も最も標準的な *vultus* から出たフランス語 *vout* はケンブリッジ詩篇に 20 例, クレティアン・ド・トロワに 8 例あるが, 中世に用いられた頻度は少く, 同じケンブリッジ詩篇には 65 例の *face* が現われている。Ovide moralisé に僅か 3 例しかないのは予想外であるが, Guillaume de Machaut, Froissart には 1 例もなく, Eustache Deschamps が最後の 1 例を示すのみである。それにも拘らずこの語は XIX 世紀に至るまでフランスの辞書には見出し語となっていて, Ménage の *Les Origines* (1650), Corneille の *Dictionnaire des Arts et des Sciences* (1694), アカデミ辞典第六版補遺 (1840), Bescherelle (1845) 等に収録されているのは, この国の古典教育と語源意識を反映している。尙この語に関してはイタリアのルッカにあったキリスト像にまつわる伝説があり Saint Vou de Lucques が信仰をあつめ有名であったことを指摘し, ダンテ, Guillaume de Malmesbury, Eadmer, Gerbert de Tilbury から Raoul de Cambrai の作者にまでこの伝説が識られ, ここから *vout* 又は *Voude luque* が, キリスト像, 聖者像としてラブレに至るまで用いられたことを教えている。ここから *envoûtement* の人形また動詞 *envoûter* 等への転義も, onomasiologie 的に他の語の転義の一環として考えると興味深いものがある。(cf. *figurine*)

Renson 氏は前述の 10 語 *chère*, *vis*, *visage*, *face*, *vout*, *viaire*, *façon*, *mine*, *figure*, *physionomie* のそれぞれについて派生語, 合成語, 慣用句を挙げ, テクストの検討によって分布, 意味, 用法の変遷を詳しく調べていて, よくこの小文の紹介し得る所ではないが, 方言については ALF, ALW, FEW 等によって作成した 27 枚の地図と豊富な図表の使用によって, この複雑な問題を手ぎわよく処理している。ロマニア全般を通じて *facies*, *vultus* を除くと, 古典ラテン語の遺産はなく, 俗ラテン *visus*, *cara*, *facia* 等ロマン語期にすべてがつくられ, 北の *facies* と南に多い *facia* の分布は, 学校教育を反映するとしている。地中海西部に見られる語根 *Murr- はカタルニアにも見られるが, 動物の鼻面から *péjoratif* として入ったこの語は *préroman* と考えられるらしい。

ロマン語相互間の伝播影響関係も地図にまとめてあって興味深く, また示唆的である。

著者の調査の入念なことは索引に載せられた「顔」に関する諸語の表現が 1800 項を超

えていることにも窺われる。今後、細部については、各作家、各方言等の個別調査でこの広域に亘る調査は修正されるべき点も持つと思うが、Renson 氏の労作は onomasiologie の記念碑として残ることは確実である。

(慶応義塾大学助教授 松原秀一)

A. Roncaglia, La Lingua dei trovatori

著者の Aurelio Roncaglia は 1917 年モデナの生れで、トリエステ、バヴィアの各大学で教えた後、1956 年より Angelo Monteverdi の後を襲ってローマ大学のロマンス語・文学の教授となった学者、すでに Chanson de Roland の校訂本 (Modena, 1947) はか、フランスの武勲詩にかんする研究、トルーバドゥール、とくに Marcabru の研究にすぐれ、現在その校訂本を準備中と聞いております。

表題の書物は、"nato nella scuola e per la scuola" と著者自身が書いているように、古代プロヴァンス語研究を志す学生のために書かれた 140 p. の小さな入門書であります。まづ造本活字などエレガントな体裁にひかれますが、単に体裁のみがエレガントでないことは、最初の章を読むだけでも十分に知ることができます。著者はまづ簡潔にプロヴァンス語とフランス語との関係にふれた後、南フランスの言語的・文化的特殊性を言語基層、南北フランスのローマ化の違い、ゲルマン化の有無の問題をかなり詳細に論じています。事実南仏が早くからローマの属州としてローマ化が他の地域に比して著しく進んでいたこと、他方北仏がⅤ世紀からⅧ世紀にかけてゲルマン化の時代であったのにたいし、南仏ではほとんどゲルマンの影響がなかった(ロマニア全体に共通のゲルマン的要素は別として)ことは、この二つの言語のその後の発展を考えてゆく上で最も重要なことでありましょう。

トルーバドゥールの時代の南仏方言は、北仏の場合同様きわめて多様であったのですが、北仏と違う点は、詩人たちが用いた言語には最初からほとんど方言差が見られず、北仏のように詩人が使用した言語からその出身地を推定することがほとんど不可能な程であったことです。著者はこのような文学語としての一種のコイネが生まれた背景に、リムージューの今はない聖マルシャル修道院の影響のあったことを示唆しています。これは必ずしも著者の創見ではなく、かなり以前から、この修道院が中世初期の文化に果たした役割、とくに問題のトルーバドゥールにかんしてはその音楽の起源の問題に関連してジャック・シャイイなどによって注目されておりましたし、一方古代プロヴァンスの現存最古の文学作品 Boeci がリムーザン方言で書かれており、その他この地で中世初期の最も重要な作品の幾つかが製作されている事実 (cf. D' A. S. Avallé, *Cultura e lingua francese delle origini nella "Passion" di Clermon-Ferrand*, p. 53) から分かるように、この地方が中世初期の文化の一大中心地であったことは明らかです。著者はこのような背景からリムーザン方言を基調とした南仏の共通文学語が成立していった事情を述べています。しかし著者はまたこの共通語が、他のどんな方言的要素、どんな階層の語彙をも拒まないだけの十分な柔軟性をもっていたこと、綴字の面でもきわめて大きな自由をもっていたために、この詩的言語が一層の豊かさを増していたことを指摘することを忘れません。一例をあげれば、"騒音"を意味する brug は次の 3 通りの韻をふむこ